

SYMPHONY



TOKYO
SYMPHONY
ORCHESTRA

Lorenzo VIOTTI, *Music Director*

80th

ANNIVERSARY

No.152

SUN. 13TH SEPTEMBER

TOKYO OPERA CITY SERIES

No.745

SAT. 19TH SEPTEMBER

SUBSCRIPTION CONCERT

No.148

SUN. 27TH SEPTEMBER

NIIGATA SUBSCRIPTION CONCERT

2026

SEPTEMBER

9

音楽監督 ロレンツォ・ヴィオッティ
桂冠指揮者 ユベール・スダーン
名誉客演指揮者 大友直人
永久名誉音楽監督 秋山和慶 ◆
永久名誉指揮者 アルヴィド・ヤンソンス ◆
上田 仁 ◆
遠山信二 ◆

名誉コンサートマスター 大谷康子

第1コンサートマスター 小川にキティングレブ
景山昌太郎
小林杏成

コンサートマスター 吉江美桜
田尻 順

会 長 澤田秀雄
理事長 岡崎哲也
副理事長 平澤 創
依田 異
専務理事 廣岡克隆
理 事 阿部武彦 竹中平蔵
池辺晋一郎 永山 治
伊藤美樹 夏野 剛
大橋 博 増岡聡一郎
宮ノジュンコ 森 京子
菅谷貴子 若本博隆
監 事 寺西基之
渡邊芳樹
評議員長 梅沢一彦
評議員 穴水 孝 星 久人
鷺海量明 森川 智
片山泰輔 芳野まい
加藤英輔
特別顧問 飯島延浩 福田紀彦
窪田雅己
永久名誉顧問 金山茂人 ◆

1st Violins

○木村正貴
○堀内幸子
○森岡ゆりあ
○小川敦子
立岡百合恵
土屋杏子
中村楓子
水谷有里
吉川万理

2nd Violins

○清水泰明
○服部亜矢子
○加藤まな
○福岡史雄
河裾あずさ
小山あずさ
鈴木浩司
吉田みのり
阿部真弓
坂井みどり

Violas

○青木篤子
○武生直子
○西村真紀
○多井千洋
○山廣みほ
新井瑞穂
小西広興
鈴木まり奈

Cellos

☆伊藤文嗣
○川井真由美
内山剛博
蟹江慶行 ●
樋口泰世
福岡茉莉子
渡邊ゆかり

Double Basses

□助川 龍
○コーディネーターズ
ローズブーム
○北村一平
○久松かず
内岡沙月
安田修平
渡邊淳子

Flutes

□相澤政宏
○竹山 愛
○知久 翔 *

Flute & Piccolo

濱崎麻里子

Oboes

○荒 絵理子
○荒木良太
浦脇健太

Clarinets

○エマニエル・スズー
○吉野亜希菜
近藤千花子
務川広貴

Bassoons

○福士マリ子
○福井 蔵
坂井由佳
前関祐紀

Horns

○上間善之
白井有琳
藤田麻理絵
津守隆宏 *

Trumpets

○澤田真人
○ローリー ディラン
野沢岳史 ●
松山 萌
早野舞花 *

Trombones

○大馬直人
○鳥塚千輔
住川佳祐

Bass Trombone

藤井良太

Tuba

近藤陽一

Timpani & Percussions

○清水 太
○山村雄大
武山芳史
綱川淳美

Harp

渡辺沙羅

Librarians

林 知也
カーン日和 *

Stage Managers

西岡理佐
山本 聡

栄誉団員

井伊 準 ◆

楽団長

廣岡克隆

編成局シニアディレクター

藤原 真

編成局

パーソネルマネージャー

謝名元 氏

楽団委員

小西広興(議長)
福岡史雄(書記)
北村一平
清水 太
清水泰明
綱川淳美

事務室長

荒井宣之

事務局

□高瀬 緑
市川萌都
伊藤瑛海
榎 日向
小川博司
相原美砂
後藤絢音
長久保宏太郎
三橋真琴
山田道子
山本未央子
□梶川純子
澤戸雅美 *

名誉団員
深江泰輔 ◆
三木晴雄 ◆

団 友

大野佳和
安藤史子
池田 章
石川晴世
今村和弘
若原淳子
土原規典
内田彬雄
内田乃例子
宇部 泰
梅田 学
大隅雅人
大塚正昭
大塚展男
大和田ルース
秋野 晃史
奥田昌史
吉川健二
立原勝二
甲斐さち子
加藤幸治
加藤信彦
金澤 茂
久保田仁志
熊原亮司
小林照雄
小林利彰
小林亮子
阪本正彦
佐川 里一
佐々木真
塩谷しずか
篠崎 隆
野野原明彦
杉浦直基
鈴木一輝
曾根敦子
高野成之
武田英昭
田中真輔
千村雅信
三嶋正司
豊山 浩
永井 聖乃
中塚和良
中塚博則
中山 智
新澤義典
西依智子
西脇秀澄
野村真澄
橋本隆弘
原田美奈子
日野 奏
ペアンテ・ボーマン
前田健一郎
松崎正昭
丸山正昭
浦正信
宮原祐子
宮本直樹
日本 隆
森みさ子
諸橋健久
渡辺 功
渡辺哲郎
渡辺裕子

演奏会でのお願い

Concert Manner Guide



チケットに記載された 座席でご鑑賞ください

チケットに記載されている座席番号にのみ有効です。
座席移動はご遠慮ください。

Please be seated at the seat number designated on your ticket.



開演前に電子機器の 電源はOFFに

マナーモードにしても振動する音が響きますので、電源は必ず切るようにしましょう。

Switch OFF your mobile telephones, wristwatch alarms and all other noise-emitting electronic devices before the performance begins.



補聴器の確認を

ご使用のお客様は、きちんと装着されているか今一度お確かめください。

For our guests who wear hearing aid devices, please check that your device is suitably set before the performance begins.



周囲の視界を遮るような 行為はやめましょう

身を乗り出しての鑑賞や、つばの広い／高さのある帽子は脱いでご鑑賞ください。リズムをとる行為もおやめください。

Please refrain from wearing hats or rhythmically swaying in a way which could disturb or obstruct the view of those seated near you.



開演後の入場を 制限させていただきます

開演後のご入場は制限させていただきます。

You will not be permitted to enter the concert hall during a performance.



演奏中の飲食は ご遠慮ください

Refrain from eating and drinking during the performance.



演奏中はお静かに

手荷物につけている鈴やビニール袋等は音を立てないようにご配慮下さい。演奏中の私語、プログラムやスコア等紙類をめくる音、かばんのチャック等をさわる音も思っている以上に場内に響きます。

Please be silent during the performance.



咳、くしゃみをする際は ハンカチで押さえましょう

ハンカチをあてがうことで音量はかなり軽減されます。

Please use a handkerchief to help suppress the noise from any coughing or sneezing.



曲の余韻も 演奏のうちです

音が消えゆく余韻を十分に感じてから拍手をお送りください。

The lingering sounds and moments are part of the performance. Please hold your applause or shouting your appreciation until the actual end of the performance.



カーテンコールを除いて、ホール内での録音・録画・写真撮影は禁止です

終演後のカーテンコールの撮影は、自席にご着席のまま、周りのお客様へご配慮いただきますようお願いいたします。
※前半終了時、アンコール演奏中は撮影いただけません。※スマートフォン、携帯電話、コンパクトデジタルカメラ以外の撮影、自撮り棒の使用、フラッシュの使用、目線より高い位置での撮影はご遠慮ください。

Photography, filming and recording are prohibited, but it is permitted to film the curtain call after the concert. Photography is not permitted at the end of the first half or during encore performances. Please refrain from taking pictures with cameras other than smartphones and mobile phones, using selfie sticks, using flash, and taking pictures at eye level or higher.

9/13

SUN

東京オペラシティシリーズ 第152回

2026年9月13日(日) 14:00 東京オペラシティコンサートホール

Tokyo Opera City Series No.152

Sun. 13th September 2026, 14:00 Tokyo Opera City Concert Hall

ロレンツォ・ヴィオッティ [指揮]

Lorenzo VIOTTI, Conductor

小林 幸成 [コンサートマスター]

KOBAYASHI Issey, Concertmaster

スッペ: 喜歌劇「詩人と農夫」から序曲(10')

SUPPÉ: Dichter und Bauer – Overture (10')

モーツァルト: 交響曲 第38番 二長調
K.504 「プラハ」(26')

MOZART: Symphony No.38 in D major
K.504 "Prague" (26')

I. アダージョ・アレグロ

I. Adagio - Allegro

II. アンダンテ

II. Andante

III. プレスト

III. Presto

休憩(20')

Intermission(20')

シューベルト: 交響曲 第2番 変ロ長調
D125(29')

SCHUBERT: Symphony No.2 in B-flat major
D125(29')

I. ラルゴー・アレグロ・ヴィヴァーチェ

I. Largo - Allegro vivace

II. アンダンテ

II. Andante

III. メヌエット: アレグロ・ヴィヴァーチェ

III. Menuetto: Allegro vivace

IV. プレスト・ヴィヴァーチェ

IV. Presto vivace

- 主催/公益財団法人 東京交響楽団
- 後援/在日スイス大使館
- 助成/文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

楽曲解説はP.5をご覧ください



アンケート
ご協力のお願い

9/13 9/19

SUN

SAT



© Tomoko Hidaki

Lorenzo VIOTTI

Conductor

ロレンツォ・
ヴィオッティ

[指揮]

Music Director

音楽監督

1990年スイス・ローザンヌ出身。リヨンでピアノ、歌、打楽器を学び、ウィーンでゲオルク・マルクの指揮者コースに参加。さらにリスト音楽院でニコラ・パスケに師事し、本格的に指揮の研鑽を積んだ。2015年ザルツブルク音楽祭ネスレ・ヤング・コンダクター賞を受賞し、一躍国際的注目を集める存在となる。さらに国際オペラ・アワード「ニューカマー・オブ・ザ・イヤー」にも選出され、国際的に急速に注目を集めた。

2018年新国立劇場でプッチーニ《トスカ》を指揮し、日本においても高い評価を得た。2018年から2021年までポルトガル・グルベンキアン管弦楽団首席指揮者、2021年から2025年までネーデルラント・フィルハーモニー管弦楽団およびオランダ国立歌劇場首席指揮者を務め、オーケストラとオペラの両分野で国際的キャリアを確立した。

ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ミュンヘン・フィル、ロサンゼルス・フィルなど、世界有数のオーケストラへも客演を重ねている。

東京交響楽団とは2014年に衝撃的なデビューを飾り、初共演から10年となる2024年8月に次期音楽監督に任命され、2026/27シーズンより第4代音楽監督に就任。2028年8月からはチューリッヒ歌劇場音楽総監督に就任する。

Born in Lausanne, Switzerland in 1990, he is an award-winning conductor, having won major competitions including the Cdaqués Orchestra and MDR Conducting Competitions, and receiving the Nestlé Young Conductors Award at the 2015 Salzburg Festival. He served as Chief Conductor of the Gulbenkian Orchestra (2018–2021) and later of the Netherlands Philharmonic Orchestra and Dutch National Opera (2021–2025). He has conducted leading orchestras such as the Vienna and Berlin Philharmonics, Royal Concertgebouw, and Los Angeles Philharmonic, and appeared at major opera houses including Vienna State Opera, Paris Opera, and La Scala. He debuted in Japan with the Tokyo Symphony Orchestra in 2014 and becomes 4th Music Director in April 2026.

He will become the General Music Director of the Zurich Opera House from August 2028.

フランツ・フォン・スッペ(1819~1895)

喜歌劇「詩人と農夫」から序曲

本作品は1846年にカール・エルマー作の三幕歌入り喜劇《詩人と農夫》のために演奏された序曲である。当時27歳だったスッペは、この序曲をすでに別の作品のもとで二度使用していたが、いずれも成功しなかった。実際、彼はアン・デア・ウィーン劇場の支配人ポコルニーの反対を押し切って、この序曲を用いた三度目の演奏に踏み切ったのである。三度目の正直にしてようやく成功を収め、エルマーの初演当夜にはアンコールが求められた。スッペに対して批判的であった批評家のアウグスト・シュミットは、この序曲について「スッペ氏は真珠であり、支配人ポコルニーはそれを金で縁取るべきである。音楽はこのうえなく愛らしい」(『ウィーン一般音楽新聞』)と褒め称えた。

結果として、この序曲の牧歌的な雰囲気と、後半の活気あふれる展開は、原作戯曲の内容にとりわけふさわしいものであった。戯曲のストーリーは、失恋に苦しむ一人の詩人が、山での休暇を利用して、田舎の娘たちとその恋人たちの間にさまざまな騒動と混乱を引き起こすという内容である。

金管楽器による華やかで荘厳な序奏の後、チェロとハープの美しい旋律が織りなす美しい6/8拍子のアンダンテが始まる。その後、気迫に満ちた雰囲気へと転換し、刺激的なシンコペーションの効いた4/4拍子のアレグロが続く。このアレグロは軽やかなワルツのリズムによるゆった

りとしたエピソードへと移行し、その後はこの二つのテーマが交互に奏でられる。

《詩人と農夫》の素朴な序曲は、大胆で雄大な主題と、明るく闊達さを誇示するような管弦楽法によって、軍国的な《軽騎兵》と並びスッペの最も著名な作品となり、以後多数の編曲が作られた。

しかしながら哀れなスッペ自身は、この不朽の成功からほとんど利益を得ることができなかった。当時、ポコルニーがスターには相当な出演料を支払う一方で座員にはそうしなかったため、スッペは常に金銭的な困難の中にいた。苦境にあった彼は、本作の権利を微々たる金額でミュンヘンの出版社へ譲ってしまったのである。この序曲は、その成立に至る起源やスッペの苦境と意地、今では忘れ去られた劇作品との関係を知らない世代の愛好家を魅了し続けている。

小川佐和子 Text by OGAWA Sawako

作曲:1846年

初演:1846年8月24日 アン・デア・ウィーン劇場

編成:フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、ハープ、弦5部

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~1791)

交響曲 第38番 二長調 K.504「プラハ」

1786年、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-91)はオペラ「フィガロの結婚」を作曲する。元々フランスで書かれた体制批判的な戯曲を基にした作品であることから、ウィーンの宮廷劇場でおこなわれた初演に当たっては、大きな話題を巻き起こした。なおこの上演と同じ時期にウィーンへ来ていたのが、モーツァルトと旧知の間柄であり、プラハ音楽世界の立者だったフランツ・ドゥシェック(1731-99)とヨーゼファ・ドゥシェック(1754-1824)の夫妻。そしておそらくは彼らの働き掛けがあって、同年の12月には「フィガロの結婚」がプラハでも上演された結果、空前の人気を博した。

こうした状況の中、モーツァルト本人をこの街に招いて同オペラを指揮してもらおうという機運が高まり、1787年の1月、彼にとって初めてとなるプラハ旅行が実現する。またこの街で「フィガロの結婚」を指揮するに先立って、プラハの音楽愛好家たちが主催する演奏会が開かれ、その席で初演されたのが交響曲第38番だ。

このような経緯があるため、当交響曲は「プラハ」の愛称で親しまれているのだが、そもそもモーツァルトがプラハでの演奏会を念頭にそれを書いたのかどうかはよく分からない。彼は自前の演奏会をウィーン…もしくは別の場所…で催すにあたり、新作として当交響曲を作っていたのだが、プラハからの招待が舞い込んだため、急遽そちらで初演する結果になったという見方が

一般的だ。

いずれにしても、一聴すると優雅な響きの中に、モーツァルトの挑戦的な姿勢がそっと刻まれている。例えば、後年の『ドン・ジョヴァンニ』における死の場面を彷彿させる不気味な曲想が立ち現れる第1楽章の序奏。その第1楽章だが、主部に入ると「魔笛」を先取りしたかのような朗らかな長調の旋律を主軸とした第1主題が出現する。ただしこの主題に関しても、シンコペーションを基本とし、一筋縄ではゆかない陰影が貝わっているのが特徴だ。第2楽章も穏やかな光の中に暗い影が密かに忍び寄るような、モーツァルトならではの軽さと深さが聴きどころ。その直後には、ユーモアを湛えながらも一瞬で駆け抜ける最終楽章が続く。

なお当作品には、モーツァルトの交響曲にはつきもののメヌエット(王侯貴族の優雅な踊りの音楽)が一切登場しない。この辺りにも、「フィガロの結婚」の作曲者にふさわしい実験精神や進取の気性が現れていると言うと大げさだろうか？

小宮正安 Text by KOMIYA Masayasu

作曲:1786年

初演:1787年1月19日 プラハ 作曲者自身の指揮による

編成:フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

フランツ・シューベルト(1797~1828)

交響曲 第2番 変ロ長調 D125

交響曲第2番が書かれた当時、シューベルトは1808年から5年を過ごした寄宿制神学校コンヴィクトを出て、父親の学校で助教員として働くかたわら、限られた時間の中で精力的に作曲を続けていた。この交響曲に取りかかる2か月前にはゲーテの詩による最初の歌曲《糸を紡ぐグレートヒェン》D118が書かれ、翌1815年には100曲以上の歌曲が誕生している。

第2番の交響曲は、1818年までに書かれた初期の6曲の交響曲の中でもっとも長大な作品である。シューベルトはコンヴィクト時代、学生オーケストラでの演奏を通して、ハイドンやモーツァルト、および初期のベートーヴェンの交響曲を学んでおり、この交響曲にも随所に古典派の巨匠たちの影響がうかがえる。一方、ソナタ形式による両端楽章では、提示部の第1主題、第2主題、提示部を閉じるコデッタがそれぞれ異なる調で現れることにより、提示部が3つの調領域を持つことになる「3調提示部」が試みられている。主調＝属調の両極性というソナタ形式の原理を拡張するようなこの手法は、後期作品にもたびたび見出される、シューベルトに特徴的な手法である。

第1楽章:ソナタ形式。ゆったりとした序奏はモーツァルトの交響曲第39番への意識が見て取れる。颯爽とした第1主題は、のびやかな第2主題と展開部のような盛り上がりを見せる推移をはさんでコデッタで再び現れる。提示部に比べて小

規模な展開部も第1主題に基づいており、楽章全体をとおして第1主題がさまざまに変化しながら聴こえてくる。

第2楽章:明るく穏やかな主題と5つの変奏からなる変奏曲。ハ短調による第4変奏は唯一フォルテで奏される。

第3楽章:ハ短調による勇壮な曲調はメヌエットとしては異例である。この主部の性格が第2楽章の第4変奏に通じるのに対して、変ホ長調の中間部は、音型的な類似も相まって同じ調による第2楽章の変奏主題を想起させる。

第4楽章:ソナタ形式。第1主題のダクテュルス(長・短・短)のリズムが楽章全体を特徴づける、爽快なフィナーレ。その構造は第1楽章とよく似ているが、愛らしく弾む第2主題が再現部では短調で現れ、耳を驚かせる。

山口真季子 Text by YAMAGUCHI Makiko

作曲:1814年12月10日~1815年3月24日

初演:1877年10月20日イギリス・ロンドン(クリスタル・パレス)、オーガスト・マンズ指揮

編成:フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

9/19

SAT

第745回 定期演奏会《東京交響楽団創立80周年記念》

2026年9月19日(土) 18:00 サントリーホール

Subscription Concert No.745《Tokyo Symphony 80th Anniversary》

Sat. 19th September 2026, 18:00 Suntory Hall

ロレンツォ・ヴィオッティ[指揮]

マキシミリアン・シュミット[テノール(ヨハネ)]

フランツ＝ヨーゼフ・ゼーリヒ[バス(神の声)]

クリスティーナ・ランツハマー[ソプラノ]

カトリオーナ・モリソン[メゾソプラノ]

パトリック・グラール[テノール]

クレシミル・ストラジャナツ[バスバリトン]

大木麻理[オルガン]

東響コーラス[合唱]

富平恭平[合唱指揮]

小川ニキティンブレブ[コンサートマスター]

字幕操作: Zimakuプラス

字幕翻訳: ミケ尻 正

Lorenzo VIOTTI, Conductor

Maximilian SCHMITT, Tenor as Johannes

Franz-Josef SELIG, Bass for Stimme des Herrn

Christina LANDSHAMER, Soprano

Catriona MORISON, Mezzo Soprano

Patrick GRAHL, Tenor

Krešimir STRAŽANAC, Bass Bariton

OHKI Mari, Organ

Tokyo Symphony Chorus, Chorus

TOMIHARA Kyohei, Chorusmaster

OGAWA Nikitingleb, Concertmaster

Subtitles operation: Zimaku Plus

Translation: MIKAJIRI Tadashi

フランツ・シュミット:

オラトリオ「7つの封印の書」

(ドイツ語上演/日本語字幕付き)

F.SCHMITT:

Das Buch mit sieben Siegeln

Sung in German with Japanese Subtitle

プロローグ、第1部(70')

休憩(20')

Prologue, Part I (70')

Intermission (20')

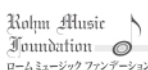
第2部、エピローグ(50')

Part II, Epilogue (50')

- 主催/公益財団法人 東京交響楽団
- 共催/サントリーホール
- 助成/文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会、公益財団法人 アフィニス文化財団、公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション、公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団、公益財団法人 花王 芸術・科学財団、公益財団法人 朝日新聞文化財団
- 後援/在日スイス大使館

ロレンツォ・ヴィオッティのプロフィールはP.4をご覧ください

楽曲解説はP.12をご覧ください



公益財団法人 花王 芸術・科学財団



アンケート
ご協力のお願い

Maximilian SCHMITT

マキシミリアン・シュミット [テノール(ヨハネ)]

ドイツ出身。ベルリン芸術大学で学ぶ。バイエルン国立歌劇場、ミュンヘン・オペラ、マンハイム国立歌劇場、オランダ国立歌劇場等でモーツァルトやワーグナーの主要作品を数多く歌う。モーツァルト、モンテヴェルディからメンデルスゾーン、マーラー等幅広いレパートリーを持ち、ノット、ウェルザー＝メスト、ペトレンコ等の指揮者陣のもと、チューリッヒ・トーンハレ管、クリーヴランド管、ゲヴァントハウス管、バイエルン放響、パリ管等へ客演を重ねている。2018年ノット指揮東京交響楽団「ゲロンティアスの夢」(ゲロンティアス役)ではその圧倒的な美声が高く評価された。シュミット「7つの封印の書」は自らのレパートリーの一つとして手中に収めた作品で、今年5月ホーネック指揮NDRエルプフィルとの公演にて同役を務めた。



Franz-Josef SELIG

フランツ＝ヨーゼフ・ゼーリヒ [バス(神の声)]

シリアス・バスという分野で世界的に最も名の知れた歌手の一人で、グルネマンツ、マルケ王、ザラストロ、ロッコ、オスミン、ダーラント、フィエスコ、ファールツ等唱歌う。ケルン音楽舞踊大学で宗教音楽を学んだ後、エッセンのアルト劇場のアンサンブル・メンバーとしてプロ活動をスタートした。バイエルン国立歌劇場、ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、マドリードのテアトロ・レアル、パリ・オペラ座、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場等世界のあらゆる有名歌劇場に出演している。一流の音楽祭にも登場しており、ティーレマン、ラトル、メータ、ムーティ、ネゼ＝セガン等の指揮者と共演を重ねている。



Christina LANDSHAMER

クリスティーナ・ランツハマー [ソプラノ]

ドイツのミュンヘン生まれ。同地の音楽院で学んだ後、シュトゥットガルト音楽演劇大学にて、コンラート・リヒターのリサイタル・クラスとドゥーニャ・ヴェイゾヴィチのソリスト・クラスで学ぶ。シュトゥットガルト州立歌劇場他で契約歌手を務めた後、ザルツブルク音楽祭でラトル指揮ベルリン・フィルと共演。アーノンクール、ブロムシュテットらトップレベルの指揮者たちと共演を重ね、オペラとコンサートで活躍する。宗教作品のソリストとしても活躍。ブロムシュテットら名匠からの信頼も厚い。今年5月、ホーネック指揮NDRエルプフィルとの「7つの封印の書」で同役を務める。



Catriona MORISON

カトリオーナ・モリソン [メゾソプラノ]

スコットランド・エジンバラ生まれ。スコットランド王立音楽院とベルリン芸術大学で学ぶ。2015年、ザルツブルク音楽祭にフランツ・ウェルザー＝メストによるヤング・シンガーズ・プロジェクトの一員としてデビュー。以降、エディンバラ国際音楽祭、ケルン歌劇場、ベルゲン国立歌劇場などに出演。BBCプロムス、ウィーン・フィルにもデビューを果たした。2024年、ノット指揮東京交響楽団「ばらの騎士」(オクタヴィアン役)で共演、美しく透明感のある歌声と豊かな表現力が強い印象を残した。2026年5月、ホーネック指揮NDRエルプフィルとの「7つの封印の書」で同役を務めた。



Patrick GRAHL

パトリック・グラール [テノール]

ドイツ・ライプツィヒ生まれ。フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ音楽演劇大学にてベルトルト・シュミットに声乐を師事。マスタークラスを優秀な成績で修了した。2016年ライプツィヒで開催された第20回国際ヨハン・セバスチャン・バッハコンクールで第1位。オラトリオ歌手として特に高い評価を得ており、ガーディナー、ラトル、ユロフスキー、ガッティ、メータ等の指揮者のもと、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ドレスデン・シュターツカペレ、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、ロンドン響等と共演している。2026年5月、ホーネック指揮NDRエルプフィルとの「7つの封印の書」で同役を務める。



Krešimir STRAŽANAC

クレシミル・ストラジャナツ [バスバリトン]

クロアチア出身。シュトゥットガルト音楽演劇大学で学び、数多くの国際コンクールで優勝。これまでにプロムシュテット、サンティ、フェドセーエフ、ハイティンク、ホーネック等世界的な指揮者のもと、バイエルン放送響、コンセルトヘボウ管、フランクフルト放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管等数多くのオーケストラと共演。2023年にはペトレンコ指揮ベルリン・フィルデビュー、2025年ロサンゼルス・フィルデビューした。2016年、ノット指揮東京交響楽団とブラームス「ドイツ・レクイエム」、2017年モーツァルト「ドン・ジョヴァンニ」(マゼット役)で高評を得た。



OHKI Mari

大木麻理 [オルガン]

東京藝術大学、同大学院修了。DAAD及びポセール財団の奨学生としてリュベック国立音楽大学とデトモルト国立音楽大学に留学。第3回ブクステフデ国際オルガンコンクール日本人として初優勝、第65回「ブラハの春」国際音楽コンクール第3位他国内外で多数受賞。

2025年最新CD『Spiral Galaxy of BACH』をリリースし絶賛されている。7月にはライプツィヒ(ドイツ)の聖トーマス教会主催の「バッハ・オルガン・フェスティバル2026」から招待を受け本場の聴衆を魅了した。

東洋英和女学院大学、東京音楽大学、静岡英和学院大学にて教鞭を執る。2018年～26年3月までミューザ川崎シンフォニーホール オルガニストを務めた。



TOMIHIRA Kyohei 冨平恭平 [合唱指揮]

東京藝術大学音楽学部指揮科卒業。群馬交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、ニューフィルハーモニー千葉、東京フィルハーモニー管弦楽団、東京ニューシティ管弦楽団、東京交響楽団を指揮している。ピアニストとしてもリサイタルの伴奏、録音や協奏曲の弾き振りをしている。洗足学園大学ピアノ科非常勤講師。東京二期会音楽スタッフ、新国立劇場音楽スタッフを経て2019年4月新国立劇場合唱指揮者に就任。



Tokyo Symphony Chorus 東響コーラス [合唱]

1987年9月、東京交響楽団専属のアマチュア混声合唱団として創立。「東京交響楽団と一体の演奏をし、より質の高い合唱付きオーケストラ曲のコンサートを提供すること」を目的としている。指導には、演奏する楽曲の背景や歌詞に使用されている言語に精通した合唱指導者、発声指導者、伴奏ピアニスト、言語指導者を招き、公演ごとに出演者を決定するオーディションを行うことで常に演奏の質を高めている。歴代音楽監督の故秋山和慶、ユベール・スダーン、ジョナサン・ノットからの信頼も厚い。古典から現代音楽、また日本初演など幅広いレパートリーに対応している。他団体からの出演依頼も多く、近年では「ラ・フォル・ジュルネ」に出演、「長野の県民文化会館とウィーン楽友協会の提携40周年演奏会」に賛助出演し好評を得た。2020年にはアマチュア合唱団として初めて「ミュージック・ペンクラブ音楽賞 室内楽・合唱部門」を受賞。

メンバー表

●合唱指揮：冨平恭平

稽古ピアニスト：古瀬安子

発声指導：大沼 徹、澤原行正、
辻 裕久、島木弥生、中山美紀

●委員長 岡 邦子 (Sop.)

●副委員長 鳥居順子 (Sop.)
堀 浩史 (Bas.)

●パートリーダー

Sop. (正)佐藤由紀子 (副)遠藤由理

Alt. (正)水越睦美 (副)小林朋子

Ten. (正)奥貫壮史 (副)内山誠彦
枇杷高志

Bas. (正)水野 敬 (副)池上陽一郎

●コーラス委員

Sop. 石村友希子、内野英子、森田恵子

Alt. 岡本いつか、竹内あゆみ、和田真理

Ten. 菅野広和、木村 健、和田 敏

Bas. 荒川雅人、仲 恭介、渡辺理公男

Soprano

相田奈寿紀

石井 恵

石村友希子

岩元邦子

内野英子

遠藤由理

大貫由香

岡 邦子

奥泉亮子

小田切明子

金杉知子

川崎仁美

川之上裕美子

草野真由美

車 伸志

小鉢月夜

昆野璃夏

佐藤かえで

佐藤深雪

佐藤由紀子

島崎尚美

菅澤和美

鈴木育代

鈴木信恵

鈴木美和

ソレントンク美

武田美香

都築靖子

デニワアナスタシア

鳥居順子

東原なお

平川暢子

藤記富子

増淵由佳

松本恵美

武藤弘美

森田恵子

森本由希

山下由美子

山之内文子

横井紀子

吉井真祈

Alto

東 恭代

安藤有子

石渡範子

伊藤晴子

伊藤弥緒乃

糸永怜奈

上原ハルミ

江藤祐子

大島裕美子

大谷洋子

岡本いつか

奥秋和歌子

奥山由里

尾崎いずみ

尾島夕里

尾田雅代

小名雅恵

加藤由美子

工藤有子

小林朋子

小張さゆり

齊藤由紀

坂元靖子

佐々木美登

佐藤真璃

佐藤理恵

須田真理子

清水穂名美

関口あずみ

高橋ユリコ

田中美樹

辻 朱美

筒井敬子

中島奏子

日野由美子

福島里美

藤嶋智子

藤盛美恵

堀西香織

水越睦美

山下裕美

山邊伸子

鈴木みお

吉野辺園恵

吉村美恵子

和田真理

渡邊朋子

渡邊史恵

Tenor

有馬 猛

五十嵐建平

内山誠彦

大崎 純

小川 徹

小川英樹

奥貫壮史

オニールロベルタ

小柳雄司

菅野広和

木村 健

小島岳登

鈴木徹也

竹内邦夫

竹田 忍

谷川 啓

塚本 隆

佃 浩一

辻 直浩

津田 宏

中込敏仁

中原裕幸

西 宏隆

野口 晃

服部俊治

堀 大二

枇杷高志

増淵 隆

水谷晴彦

和田 敏

Bass

荒川雅人

池上陽一郎

伊原秀臣

大足史郎

小笠原 聡

岡野一哉

河村太郎

菊池 靖

北浦康勢

倉沢正樹

河野 愛

小沼敬四郎

篠田一朗

杉山慎二

清水 達

竹内誠治

土井 文

仲 恭介

萩野 慎

早川克己

平川尚義

堀 浩史

松本 望

水口敏也

水野 敬

宮寺 昇

守谷隆一

柳谷一彦

山口 卓

山崎弘光

山之内達也

山原勝裕

横尾 優

米田 光

渡辺理公男

フランツ・シュミット(1874~1939)

オラトリオ「7つの封印の書」

オーストリアの音楽家、フランツ・シュミット(1874-1939)が最晩年に作曲した『7つの封印の書』は、本人のさまざまな活動の集大成として、そして両大戦期におけるオラトリオの傑作として、いま俄然注目を浴びている。オーストリア以外ではいまなお知名度が高いとはいえないシュミットについて、まずは簡単にその生涯を振り返っておこう。

1874年12月22日、シュミットは、当時オーストリア領のプレスブルクと呼ばれた現在のブラチスラヴァに生まれた(シェーンベルクと同年の生まれ)。1888年、一家はウィーンへ移住。楽友協会音楽院でチェロ、音楽理論と作曲を学び、ブルックナーの講義にも出席したという。1896年に優秀な成績で学業を修了すると、14人の応募者の中からウィーン宮廷歌劇場管弦楽団(1914年まで)およびウィーン・フィルハーモニー管弦楽団(1911年まで)のチェロ奏者に採用され、同時にオルガン奏者としても活躍の幅を広げた。

1899年には『交響曲第1番』を作曲。1901年からはウィーン音楽院で教鞭を執りはじめ、1911年にはチェロ、ピアノ、対位法、作曲の正教授に就任した。作曲家としては、1914年に第1作となるオペラ『ノートル・ダム』がウィーンで初演さ

れ、これが生涯を通じた最大の成功作となった。演奏家、作曲家、教育者として活躍を続けたシュミットは、まさに完璧な「音楽家」の名にふさわしい。

1932年、娘エマが第1子を出産して間もなく亡くなったことで、シュミットは心身の不調に陥った。『交響曲第4番』は、娘へのレクイエムとして構想されたものであり、オラトリオ『7つの封印の書』成立にもおおきな影響を及ぼした。1935年から1937年にかけては、悪化する体調と格闘するようにこのオラトリオの構想・作曲に没頭している。1938年6月15日、『7つの封印の書』はオズヴァルト・カバスタの指揮、ウィーン交響楽団の演奏によって初演された。シュミットはバッハからヘンデル、ハイドンによるオラトリオの伝統、そしてシューベルトとブルックナーから連綿と続いたオーストリア音楽の伝統、あらゆる要素をひとつに統合した、20世紀の傑作を生み出した。翌1939年2月11日、シュミットはウィーン近郊のペルヒトルツドルフにて死去。ウィーン中央墓地に葬られた。

本作は「オラトリオ」と呼ばれるが、題材となった新約聖書「ヨハネの黙示録」

の内容をヨハネ自身が語るその作劇手法は、バッハに代表される「受難曲」の様式にも近いように見える。「オラトリオ」と「受難曲」はどちらも宗教的な題材に基づく大規模な声楽曲で、オペラとは異なり、舞台装置や演技を伴わない(演奏会形式での)演奏、という点でも共通している。だが、「受難曲」は題材が福音書に記されたキリストの受難に限定されるのに対して、「オラトリオ」は旧約・新約聖書のさまざまな物語を題材とすることができる。本作においては、シュミット自身が、新約聖書に題材を得つつも、その内容を自由に翻案し、組み替えたうえで台本を作成している。ヘンデルの《メサイア》が先行作品としてはふさわしいと言えるか。

実際、シュミットはこのような自身の立ち位置を演奏者や聴き手に理解してもらうため、初演に際してみずから「台本に関するいくつかの所見」を執筆した(総譜に所収)。その立ち位置は、以下の声明が端的に示してくれている。「私は原典に忠実に従い、この作品に対しては、自分が深く信仰心に満ちた人間および芸術家という立場をあきらかにした。この見解によって、解釈におけるある種の自由さをも説明できるかもしれない。例えば、黙示録が書かれた当時、すでに高齢

の老人であったヨハネを、私は若者として捉え、その音楽をそのような若者の気質で解釈して作曲している」

全体は大きく3つの部分に分けられ、各部分は中断されることなく演奏される。

プロローグ

作曲家によって「天国の序章」と題された。ヨハネによる挨拶の呼びかけ(恵みが汝らにあるように)からはじまり、主によるヨハネの召命(我はアルファでありオメガである)、御座への出御、礼拝の儀式(聖なるかな)、主の手にある書物(独唱四重唱とフーガ)、小羊の幻視、小羊による7つの封印の書の受領が続き、すべてほぼ原典通りに再現されている。神からヨハネへの黙示の啓示に続き、神の玉座では、天使から巻物を渡された小羊が封印を解いてゆく。合唱が極めて複雑な役割を担い、ヨハネの言葉を反復しつつ、全被造物の讃歌が統合される。

第1部

第1部、第2部の冒頭にはオルガン・ソロが置かれ、間奏曲の役割を果たす(オルガン奏者としてのシュミットの面目躍如)。第1部では7つの封印のうち6つが解かれ、人類の歴史が示される。第1の白

フランツ・シュミット(1874~1939)

オラトリオ「7つの封印の書」

い騎士(イエス・キリスト)によって教義が広められる(合唱「王の中の王」)。しかし、地獄の軍勢を率いる第2の赤い騎士(合唱)、飢饉を示す第3の黒い騎士(独唱+合唱)、疫病と死を示す第4の蒼白い騎士(独唱)によって世界は渾沌へ。殉教者への復讐として、主は地震・洪水・世界大戦によって人間に死を与える(第5・6の封印、合唱)。大波の描写と、それによって犠牲になる人間たちの体験が、「水のフーガ」で具象的に描かれ、第1部のクライマックスをかたちづくる。

第2部+エピローグ

オルガン・ソロの後、第7の封印が解かれる。大いなる静寂。ヨハネは静かに、救世主の誕生、悪魔の信奉者たちとの戦い、最終的な勝利までを物語る。ラッパを吹き鳴らす七人の遣い。第6のラッパまで世の苦しみが続き、第7のラッパに

よって合唱が「いまやこの国は我らが主のもの」と喜びを歌う。最後の審判を描くこのラッパの場面のクライマックスでは、前奏曲と四重フーガが用いられ、複雑な作曲技法が冴え渡る。

やがて世界は生まれ変わり、神によって救いと恵みがもたらされるエピローグ。プロローグで聴かれた「アルファにしてオメガ」と告げる主の声がふたたび聞こえ、神への感謝を示すハレルヤコーラスでは浄化されたものたちの喜びの声が響きわたり、男声合唱によるグレゴリオ聖歌の様式でも神への感謝が唱えられる。《交響曲第4番》でも見られた、最初と最後を同じモティーフで結ぶ手法は本作でも踏襲され、プロローグの音楽が回帰し、ヨハネと合唱が「アーメン」と唱えて締めくくられる。

広瀬大介 Text by HIROSE Daisuke

作曲:1935年~1937年

初演:1938年6月15日 オズヴァルト・カバスタの指揮、ウィーン交響楽団

編成:ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット3(D管クラリネット、バスクラリネット持替)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンションシンバル、トライアングル、タムタム、オルガン、弦5部、独唱6人、混声合唱

〈同プログラム公演〉

フランツ・シュミット
オラトリオ「7つの封印の書」

9/21(月・祝) 14:00 開演
会場:ミューザ川崎シンフォニーホール

MUZA
KAWASAKI
SYMPHONY HALL

9/27

SUN

第148回 新潟定期演奏会

2026年9月27日(日) 17:00 リューとぴあ 新潟市民芸術文化会館コンサートホール

Niigata Subscription Concert No.148

Sun. 27th September 2026, 17:00 Ryutopia Concert Hall

ユベール・スダーン[指揮]
アレクサンドラ・ドヴガン[ピアノ]
景山昌太郎[コンサートマスター]

Hubert SOUDANT, Conductor
Alexandra DOVGAN, Piano
KAGEYAMA Shotaro, Concertmaster

メンデルスゾーン:序曲「フィンガルの洞窟」
op.26(12')

MENDELSSOHN : The Hebrides Overture
op.26 (12')

ショパン:ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調
op.21 (30')

CHOPIN : Piano Concerto No. 2 in F minor
op.21 (30')

I.マエストーソ
II.ラルゲット
III.アレグロ・ヴィヴァーチェ

I. Maestoso
II. Larghetto
III. Allegro vivace

休憩(20')

Intermission (20')

メンデルスゾーン:交響曲 第4番 イ長調
op.90 「イタリア」(30')

MENDELSSOHN : Symphony No.4 in A major
op.90 "Italian" (30')

I.アレグロ・ヴィヴァーチェ
II.アンダンテ・コン・モート
III.コン・モート・モデラート
IV.サルタレッロ:プレスト

I. Allegro vivace
II. Andante con moto
III. Con moto moderato
IV. Saltarello: Presto

●主催/公益財団法人新潟市芸術文化振興財団、TeNYテレビ新潟
●助成/文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
新潟定期演奏会は、新潟市からの補助金の交付を受けて実施しています。

楽曲解説はP.18をご覧ください



アンケート
ご協力のお願い

9/27

SUN



©N. Ikegami

Hubert SOUDANT

Conductor

ユベール・スダーン
[指揮]

東京交響楽団桂冠指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢の名誉アーティスティック・アドバイザーを務めるユベール・スダーンは、1946年、オランダ・マーストリヒト生まれ。ブザンソン国際指揮者コンクール最高位、カラヤン国際指揮者コンクール第2位などに輝き、フランス国立放送フィル、ザルツブルク・モーツァルテウム管の首席指揮者、東京交響楽団音楽監督等を歴任。ベルリン・フィル、ロンドン響、ミュンヘン・フィル、ドレスデン・シュターツカペレ、ミラノ・スカラ座管、ローマ・サンタ・チェチーリア管など主要なオーケストラと共演し、オペラの分野でもパリ、パルマ、パレルモ、ボローニャなどのオペラハウスで精力的に活動を展開。2004年7月、ザルツブルク市名誉市民およびオーストリア・ザルツブルク州ゴールデン勲章を授与された。近年は、大阪フィル、兵庫芸術文化センター管、札幌響、愛知室内をはじめとする日本各地のオーケストラから招かれている。

Born in the Netherlands, Hubert Soudant launched his international career after winning the highest award at the Besançon International Conducting Competition, second prize at the Karajan International Conducting Competition, and first prize at the Guido Cantelli International Competition. He has since been invited to conduct leading orchestras such as the Berlin Philharmonic, London Symphony, Vienna Symphony, Munich Philharmonic, La Scala Philharmonic in Milan, Teatro dell'Opera di Roma, and Teatro La Fenice in Venice. Following his tenure as Music Director of the Orchestre Philharmonique de Radio France, he served for 13 years as Music Director of the Mozarteum Orchestra of Salzburg. In July 2004, he was awarded honorary citizenship of the City of Salzburg and the Golden Decoration of the State of Salzburg, Austria. From September 2004, he served as Music Director of the Tokyo Symphony Orchestra for ten years and currently holds the title of Conductor Laureate. Since September 2022, he has been Honorary Artistic Adviser of the Orchestra Ensemble Kanazawa.



Alexandra DOVGAN

Piano

アレクサンドラ・
ドヴガン
[ピアノ]

2007年、音楽一家に生まれる。4歳半よりピアノを始め、5歳でモスクワ音楽院附属中央音楽学校に入学、名教師ミラ・マルチェンコに師事。モスクワで開催された第2回グランド・ピアノコンクールのグランプリを10歳で受賞。現在はスペイン・マラガで研鑽を積む。12歳のときに出会った現代最高峰のピアニスト、グリゴリー・ソコロフとの芸術的交流は彼女の音楽的成長に大きな影響を与え、その卓越した才能が高く評価されている。

これまでにベルリン・フィルハーモニー、ウィーン楽友協会、アムステルダム・コンセルトヘボウ、チューリヒ・トーンハレ、パリ・シャンゼリゼ劇場など世界屈指のホールに出演。ドゥダメル、ヤルヴィ、ピノック、インキネンらと共演を重ね、2025/26年シーズンにはカーネギーホール、ケネディ・センターへのデビューを果たした。

その成熟した音楽性はソコロフ、ブッフビンダーをはじめ多くの音楽家を魅了し、世界で最も注目を集める若きピアニストの一人として確固たる地位を築いている。

Born into a family of musicians in 2007, Alexandra Dovgan began playing the piano at the age of four and a half. At five, she entered the Academic Central Music School of the Moscow State Conservatory, studying with the renowned teacher Mira Marchenko. At just ten years old, she won the Grand Prix at the II International Grand Piano Competition in Moscow. She is currently continuing her studies in Málaga, Spain. Since meeting Grigory Sokolov at the age of twelve, his artistic guidance has profoundly influenced her musical development, and he has spoken with great admiration of her exceptional talent.

Alexandra has appeared at many of the world's leading concert halls, including the Berlin Philharmonie, Vienna Musikverein, Amsterdam Concertgebouw, Tonhalle Zürich, and Théâtre des Champs-Élysées. She has performed with conductors including Gustavo Dudamel, Paavo Järvi, Trevor Pinnock, and Pietari Inkinen. Her remarkable musical maturity has earned the admiration of artists such as Grigory Sokolov and Rudolf Buchbinder, establishing her as one of the most outstanding young pianists of her generation.

フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ (1809~1847)

序曲「フィンガルの洞窟」op.26

メンデルスゾーンは、幅広い教養を身に付けた多彩な音楽家であった。哲学者の祖父、銀行家の父親をもち、幅広い分野で水準の高い教育を受けた。その人格形成の最後の仕上げとして行われたのが、ヨーロッパ各地への大旅行である。イギリス良家の子弟が行う「グランド・ツアー」の慣習に相当するもので、メンデルスゾーンは1829年夏にスコットランドとウェールズ、1830年~1832年にはドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、フランス、イギリスを旅している。

旅の思い出は、記録に残したくなるものである。旅行日記をつけたり、家族や友人に宛てて手紙をしたためることもあれば、町の景観を鮮やかに描き出した「都市景観画」をお土産に買うなども当時流行っていたようだ。しかしメンデルスゾーンは自身が優れた水彩画家でもあり、スケッチブックに旅先の風景を描いた。さらに彼には、音楽という手段もあった。本日演奏されるメンデルスゾーン作の2曲は、どちらも旅によって着想を得た作品である。

演奏会用序曲《フィンガルの洞窟》は、メンデルスゾーンが1829年の旅行でスコットランド西海岸のヘブリディーズ諸島に到着した際、冒頭を思い付いたようだ(家族宛ての書簡にスケッチがある)。しかしこの旅行中には完成せず、1830年末のローマ滞在中に一旦の完成をみたものの、1832年の改訂を経て現在の形に落ち着いた。

メンデルスゾーンは作曲時から演奏会用序曲集の楽譜出版に至るまで、《ヘブリディーズ諸島》や《孤独な島》など題名を何度も変更し直していたことが知られている。こうした題名は着想を得た地を指し示すだけでなく、ロマン主義者たちを魅了した「オシアン伝説」も含意している。ジェイムズ・マクファーソンが発見して翻訳したと称した、古代の詩人オシアンが書いたとされる長編叙事詩の舞台であったためだ。交響詩を先取りするようなスケールの大きい作品といえよう。

楽曲はソナタ形式で構成される。口短調の第1主題は分散和音の下行音形が特徴的で、装飾音による揺らぎは波を表すかのようだ。第2主題は二長調となり、チェロとファゴットによる伸びやかな旋律が提示される。これらの主題をふんだんに用いた展開部の後、両主題が再現部で簡略化されて回帰する。そのうち第2主題は口長調で高声部のクラリネットが担い、「穏やかに」そして「少し遅く」現れるため、古き良き過去を懐古するかのように響く。結尾部で元の調とテンポになり、現実に戻されて終止する。

高松佑介 Text by TAKAMATSU Yusuke

作曲:1829年8月7日~1830年12月16日、1832年6月20日までに改訂

初演:1832年5月14日 ロンドン

編成:フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

フレデリック・ショパン(1810~1849)

ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 op.21

出版が後になったため第2番となっているが、作曲は第1番とされるホ短調より先。このヘ短調のピアノ協奏曲が初めて、故郷のワルシャワ国立劇場に鳴り響いた夜は、ウィーン・デビュー成功を引っ提げワルシャワに帰還したショパンが、その名を郷里において不動のものにした瞬間でもあった。ショパンをウィーンに送り出した父・ニコラは、フランスが治めるロレーヌ公国のマランヴィル(葡萄とワインの名産地は現在、仏北西部のヴォージュ県下に含まれる)に生まれた。彼を可愛がってくれたアダム・ヴェイドリヒを領地の管理人として雇用したポーランド貴族ミハウ・パッツ伯爵は、ポーランド史上に刻まれる自由と独立への闘い「バール連盟」を率いた1人であり、ヴェイドリヒが若くして秘書として仕えたミハウ・ヴィエルホルスキも、連盟が思いを伝えるためにヨーロッパ各国に送った使節の1人で、ルイ15世宮廷に赴いた人だった。パッツ伯爵死後、ヴェイドリヒと共にニコラ(ミコワイになる)がポーランドの地を踏んだのは16、7歳のこと。

その後、ショパンが生まれた年に父ミコワイは、ワルシャワの高等学校教授の席を得る。校長サミュエル・リンデの計らひだったそうだが、名高い言語学者リンデの目に留まる存在になっていたであろう。ミコワイは、学校の入った宮殿の中で、地方からの上流子弟のために、良質な食事や洗練された礼儀作法を

身につけられる高級寄宿舍を営む手腕も発揮し、ショパン家のサロンはワルシャワの知識人たちが彩るところとなっていた。

このヘ短調のあとに作曲されたホ短調を初演した1830年10月の公演から20日余り後にワルシャワを離れたショパンが、再びポーランドの地を踏むことはなかった。

第1楽章 マエストーソ ヘ短調 4/4

協奏風ソナタ形式

第2楽章 ラルゲット 変イ長調 4/4

ショパンが親友のティトウス・ヴォイチェホフスキに「憧れの人を見つけてしまった」と書き送った、ソプラノのコンスタンツィヤ・グワトコフスカを想って書いた楽章と言われる。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ ヘ短調 3/4

小倉多美子 Text by OGURA Tamiko

作曲:1829~30年

初演:1830年3月17日、ワルシャワ国立劇場 指揮:カール・フルビンスキ、作曲家自身のピアノ・ソロによる

編成:独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、バストロンボーン、ティンパニ、弦5部

フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ (1809~1847)

交響曲 第4番 イ長調 op.90「イタリア」

「君よ知るや南の国」——ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスター』に登場するミニョンの歌に象徴されるように、オレンジの花咲くイタリアはドイツ人憧れの地であった。霧に包まれたロマン的なスコットランドとは対照的に、明朗な古典主義を体現する美しい自然の国。メンデルスゾーンは大旅行のうち1830年10月~1831年7月をイタリアで過ごし、「やはりここは芸術の国なのです。というのも、ここは自然の国であり、その生命はいたるところに息づいているからです。青い空にも、海にも、木々にも、十分に音楽があります」と手紙に書いている。このようにして、イタリアをテーマにした作品を書く意欲がかきたてられたようだ。

とはいえ、着想のまま一気に呵成に書き上げたのではなく、構想と中断による紆余曲折のプロセスを経ている。イタリア滞在の始め頃にアイデアが浮かび、1831年春ごろ集中的に取り組んだようだが、滞在中には完成しなかったとみられている。結局は1832年11月のロンドンのフィルハーモニック協会からの依頼を契機として、1833年3月に完成をみた。翌年に改訂稿も作られたが、作曲者の没後に刊行された出版譜のもととなった1833年稿が広く普及しており、本日も一般的なバージョンで演奏される。なお、作曲者自身は『イタリア』という題名を与えておらず、受容の過程で終楽章の「サルタレッロ」から推測されたようである。

第1楽章はソナタ形式を取る。エネルギーに満ちたイ長調の第1主題は弦楽器、ホ長調の第2主題は木管楽器が奏することで対比が意図されている。形式的特徴は、展開部において短調の新しい主題が現れる点にある。冒頭動機と組み合わせられる技法面のみならず、第4楽章のサルタレッロに通じるリズムをもつ点でも興味深い。

第2楽章は緩徐楽章で、憂いに満ちたA部と伸びやかなB部が交代する5つの部分(ABABA)から成る。巡礼の行進を思わせる曲調が印象的だ。

第3楽章は優雅なメヌエットで、ハイドンやモーツァルトのような古典的な書法を取る。トリオ部には、ドイツの森や狩りを象徴するホルンの響きが組み込まれている。

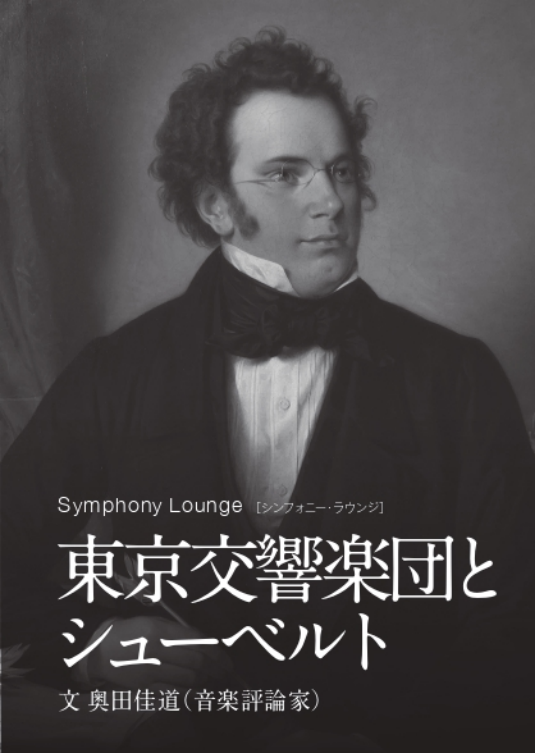
第4楽章は自由なソナタ形式を取るが「サルタレッロ」と明記され、イタリアの急速な民俗舞曲となっている。通底する舞踏のリズムだけでなく、タンバリンや笛を思わせるような響きも、土着の性格を強調している。

高松佑介 Text by TAKAMATSU Yusuke

作曲: 1831年に着想、1833年1月~3月

初演: 1833年5月13日、ロンドンにて作曲者の指揮

編成: フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部



Symphony Lounge [シンフォニー・ラウンジ]

東京交響楽団と シューベルト

文 奥田佳道(音楽評論家)

選曲からして魅せたベートーヴェンの交響曲第1番とマーラーの交響曲第1番(5月、サントリーホールでの第740回定期演奏会)を通じ、ロレンツォ・ヴィオッティと東京交響楽団は新たな響きの層や広がりを探求。近未来に達するであろう巧緻なアンサンブルを予告した。創立80年をこぼろ東響と第4代音楽監督ロレンツォ・ヴィオッティへの関心は高まるばかりである。

5月定期後の小宴でビュッフェのトレイを見つめていたマエストロに、これまでにウィーン、チューリヒで聴いたプログラム、演目を挙げながら声をかけた。立ち話の内容を明らかにしても、音楽、演奏家、聴きての環を愛でるジェントルな彼は怒らないだろう。

「ありがとう。ベートーヴェンの第3楽章から第4楽章をアタックで続け、第4楽章最初のG(ソ)音をはっきりさせたのは、音楽がそれを求めている、と考えたからです

(と言ってスケルツォからフィナーレへの転換を同じテンポで歌い出す)。ベートーヴェンはあの場面でジャケットを脱ぎ、アレグロ・モルト・エ・ヴィヴァーチェで駆け出すのです。

(2026年)6月のツェムリンスキーの交響詩「人魚姫」(ウィーン・フィル定期)にも来てくれるのですか。ウィーンではプッチーニの三部作も指揮します。」

9月の東京オペラシティシリーズでメインを飾るシューベルトの交響曲第2番への筆者の個人的な想いを伝え、美しい交響曲第2番はクラウディオ・アバド、第3番はカルロス・クライバーの愛奏曲でしたね、も立ち話のなかで出たが、小宴でのマエストロとの会話はそこまで。

シューベルトと東響と言えば、秋山和慶を引き継いで第2代音楽監督に迎えられた硬派熱血漢、桂冠指揮者のユベール・スザンだ。2008年度のシューベルト・チクルスはディスクでも配信でも楽しめる。

指揮棒、指揮台を使わずに、フレーズやハーモニーの変幻を幾分前かがみで指示し続ける指揮姿が目につく。音楽の句読点に厳しく、自分仕様のパート譜持参で整ったアンサンブルを希求するスザンは今も東響の大切な指揮者だが、とにかくこの人はハイドン、シューベルト、シューマン、ブルックナー、それにマーラーの編曲にうるさい。もとい、一家言ある。音楽監督最後の定期演奏会(2014年3月29日)もシューベルトの交響曲第2番だった。ちなみに、その一週間前のオペラシティシリーズ(2014年3月22日)は最初と最後の交響曲を含むオール・ハイドン・プログラムだった。

「ハイドン、モーツァルト、シューベルトでいい演奏をするシンフォニー・オーケストラ。それがいいオーケストラです。シューマ

東京交響楽団とシューベルト

ン、メンデルスゾーン、ブルックナーでも同じことがいえます。たくさんの音符を音にしたところで音楽にはなりません]

スダーンの好きな言葉を久しぶりに引っ張り出してみた。

明晰なタクトさばきの秋山和慶とともにオーケストラの基本形を創り上げ、近現代のオペラ、大曲、超難曲に挑んだ東響は、中欧の響きと小気味いいアンサンブルに「こだわる」スダーンと表層的な喝采を博しにくいウィーン古典派、ドイツ・ロマン派に取り組み、クラシカルな領域でも一定の成果を挙げた。そして第3代音楽監督ジョナサン・ノットの、コンサートの中でも新たな解釈やアイディアがひらめいたかのような音楽づくりを体感。ノット=東響はラフマニノフの交響曲第2番ほかで魔境を紡ぐ。レパートリーによっては、音符と精妙かつ自在に戯れた。表現が音楽評論家的過ぎるだろうか。

われらがロレンツォ・ヴィオッティも奇をてらわない。この夏は、作曲家の絆ばかりでなく、1880年代のウィーン楽友協会をも映し出すブラームスの交響曲第3番とドヴォルザークの交響曲第7番を披露した(2026年7月定期、新潟定期)。色彩と音響のコントラストばかりでなく、オーケストラ内のソリスト紹介も意図したドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」、リムスキー=コルサコフの「スペイン奇想曲」、それに交響組曲「シェエラザード」も喝采を博す(フェスタサマーミュージア開幕)。

新音楽監督の選曲は一見オーソドックスだが、東響に何が必要か、そのために何を演奏すべきか、次にどんな景色、音色を共有するか。そこまで考えてプログラムを出しているのではないか。

東響をさらに素敵なオーケストラにしたい。

となれば、スダーンの言葉ではないが、最初から最後まで音符が多く、ごまかしの利かないシューベルトだ。果てしなく繰り返されるフレーズに奇蹟の歌の調べ、大胆な転調。すべてが魅力となるシューベルトの交響曲第2番に行きつく。古典の様式美と驚くべきスケール感をあわせもつシューベルト若き日の逸品である。アンサンブル形成に欠かせないこのシンフォニーは、シューベルトに手を差し伸べたウィーン音楽界の名士オットー・ハトヴィヒ邸のオーケストラにより初演されたか。

1980年代中葉、ウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任したクラウディオ・アバド(1933~2014)が若手中心のヨーロッパ室内管弦楽団とシューベルトの交響曲全曲録音を開始した際、ふだんは寡黙なアバドが、ウィーンのメディア、そしてリハーサル見学を許された私たち学生に、シューベルトの初期交響曲の重要性を力説していたことを鮮やかに思い出す。

よそ様のお話が多くなってしまった。ロレンツォ・ヴィオッティと東京交響楽団が初年度に用意したとっておきのウィーン・プログラムを満喫しつつ、現代の名コンビ醸成に想いを寄せたいものである。



2026年5月音楽監督就任披露公演、終演後に話すユベール・スダーンとロレンツォ・ヴィオッティ。

東京交響楽団サポート会員

東京交響楽団へご支援いただいている皆様です。心より感謝申し上げます。

※新会員の方です。ありがとうございました(8月18日現在、五十音順)。

ご
芳
名
(敬
称
略)

法
人
会
員

●プラチナ会員

株式会社ティー ワイ リミテッド
株式会社フェイス

株式会社ドワンゴ

●ダイヤモンド会員

有限責任 あずさ監査法人
株式会社伊藤総合事務所
株式会社イノアックコーポレーション
株式会社インサイド・アウト
株式会社エイチ・アイ・エス

環境ステーション株式会社
株式会社すかいらーくホールディングス
株式会社日本財託
株式会社パナソニックグループ
株式会社モリモト

●ゴールド会員

株式会社青山メインランド
株式会社あ佳音
オリエンタル酵母工業株式会社
サントリーホールディングス株式会社
社会医療法人財団石心会
玉川学園・玉川大学
中外製薬株式会社
株式会社TFDコーポレーション
株式会社鉄鋼ビルディング
株式会社トーションパートナーズ

西松建設株式会社
株式会社NIPPO
株式会社日本M&Aセンター
ヒノキ新業株式会社
司法書士法人ふなざき総合事務所
ミヨシ油脂株式会社
ヤマザキビスケット株式会社
ヤマト科学グループホールディングス
税理士法人WATANABE

●シルバー会員

株式会社NHKビジネスクリエイト
公益財団法人青梅佐藤財団
川崎信用金庫
松竹株式会社

月島食品工業株式会社
東京鐵鋼株式会社
司法書士法人村田事務所

●ブロンズ会員

アーティスト
ホールディングス株式会社
株式会社ヴァリューズ
カトーレック株式会社
NPO法人かわさき市民アカデミー
株式会社シグマコミュニケーションズ
新宿村スタジオ
神宮前耳鼻咽喉科クリニック
有限会社青史堂印刷

ニッシンエレクトロ株式会社
合同会社ハイム
株式会社BDA
富士フィルムビジネス
イノベーションジャパン株式会社
神奈川支社
前山歯科医院
株式会社LALLヒューマン
ホールディングス

賛助企業

政鬼運輸株式会社

山崎製パン株式会社

匿名3社

東京交響楽団へご支援いただいている皆様です。心より感謝申し上げます。
*新会員の方です。ありがとうございました(8月18日現在、五十音順)。

伊藤 晴美	木暮 紀子
伊藤 美樹	清水 尚彦
沖田 陽子	山口 積恵
賀海 量明	匿名 5名

荒木	陽子	手塚	和彦
田猪	隆文	戸川	二郎
上井	孝昭	長瀬	雅則
岡野	哉一	平山	智史
後藤	実	山本	誠一郎
		匿名	2名

天野 五十 澤川 岩田 内山 梅沢 遠藤 大城 大崎 太田 大塚 大岡 尾崎 畑山 片片 山金 山金 山金 山金 菊池 木内 小林 古丸 近藤 齋藤 佐々 野清 清水 白井 鈴木 高澤	住和 建連 平依 世	菜晴 新誠 麻衣 和幹 明子 肇純 具浩 邦茂 主一 輔千 弘尚 生好 實買 光剛 正則 光健 和喜 秀木 貞勝 幹恭 一惠 貴子	高田 高野 高島 高家 田中 竹田 谷川 谷藤 千葉 角田 澤中 永松 成裕 西谷 田美 根根 堀江 増岡 水越 森口 森下 八上 山山 山山 山本 吉村 岡田 匿名	官光 麻幸 一琢 己行 正之 博忍 建一 啓明 雄清 隆守 正豐 明成 祥念 公男 保子 高志 久人 智巳 聡一 睦美 京健 優子 田彦 昭典 重雄 明弘 治彦 惠子 修一 名	直子 子保 子保 子保 久人 一郎 美智 健 彦 典 雄 明 彦 惠 修 名
--	---------------------	--	--	---	---

東 恭代	大野 紀子
有江 純子	奥秋 和彦
石原 祥子	加香 雄一
潮田 伊織	河野 愛
大川 朋彦	小林 義彦

司馬志之
誠比基守

中島 信男
早川 利郎
松信 正志
村松 秀幸

山口 聡
山田 修造
吉田 哲四郎
匿名 3名

秋山眞一郎
明堯洋一樹
荒澤石井
石井澤石
岸岩大
大塚大
大塚大
岡村本
小川小
瀬田小
田島小
尾田小
皆加切
藤蘇明
加藤美
菊池治
菜池仲
北鋪洋
川鋪裕
久保司
久保司
小泉博

河野小古	太曾	孝
木杉平	紇	因智子
小林山	信美	智代子
小佐藤	悦司	健元
清水水	元枝	良和
清水保	田弘	也明
新杉田	鈴木	忠三
鈴木根	坂内	善由
高坂中	田美	子貢子
田中筑	美広	眞子
都富田	豊博	彦綱
富永村	直元	幸雄
中村永	幸悦	子弘
西田西	尚研	

[illegible]

あ
磯塚 志子
赤倉 文男
秋元 達彦
朝倉 裕一
浅安 昭毅
達阿 由紀
生田 弘浩
池田 圭平
石川 泰宏
丸丸 勉
磯村 博
井手 宗功
伊藤 力雄
伊藤 貴代
榑垣 聖恵
稻葉 恵子
井上 康子
井上

猪瀨	正	夫
今井	紀	男
今井	美	知子
今井	知	子
岩澤	淳	裕
岩村	一	亮
岩上	豪	洋
田居	正	昭
田内	泉	男
海内	誠	重
宇野	正	芳
梅里	拓	志
梅崎	耕	元
梅原	秀	千
梅江	子	枝
藤大	祐	子
泉大	雄	彦
大川	成	実
大島	剛	克
	義	

大島	初彦	美也
大島	康裕	子徳
大島	須賀	久司
大島	塚友	智弘
大島	大賀	由香
大島	大賀	喜慶
大島	大森	幸裕
大島	大和	吉子
岡田	浩一	京子
岡田	正美	道徳
岡田	野本	勝利
岡田	小川	幾子
小川	知子	徹子
沖	和歌	子子
秋	亮子	美子
泉		
泉		
田		

東京交響楽団サポート会員制度

東京交響楽団は、一流指揮者の招聘やチャレンジングなプログラミングによる定期演奏会の充実、次世代を担う子供たちの育成等、これまで以上に積極的な演奏活動を展開し、音楽文化の向上に努めて参ります。
そのために不可欠な運営基盤の強化のため、広くご支援をお願いしております。みなさまのご入会を心よりお待ちしております。

個人会員

フレンズ1 年額 1万円 ～29,999円	フレンズ3 年額 3万円 ～49,999円	フレンズ5 年額 5万円 ～99,999円
サークル10 年額 10万円 ～249,999円	サークル25 年額 25万円 ～499,999円	サークル50 年額 50万円 ～

法人会員

東京交響楽団とのパートナーシップは、御社のイメージアップにつながるだけではなく、従業員の皆様の福利厚生にもつながります。

ブロンズ 年額 10万円 ～	シルバー 年額 30万円 ～	ゴールド 年額 50万円 ～	ダイヤモンド 年額 100万円 ～	プラチナ 年額 1000万円 ～
---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	------------------------------------	-----------------------------------

会員特典

詳細はHP、
又はお電話でお問合せ下さい

	法人会員	サークル 会員	フレンズ会員		
			フレンズ5	フレンズ3	フレンズ1
主催公演へご案内	○	○			
ゲネプロ見学会(年3回以上)	○	○	○	○	
リハーサル見学会(年3回以上)	○	○	○	○	○
ご芳名掲載	○	○	○	○	○
主催公演チケット先行予約 ^{*1}	○	○	○	○	○
公演チケットをご優待価格にてご案内 ^{*2}	○	○	○	○	○

^{*1}一部対象外もございます。^{*2}東京交響楽団の主催公演およびミュージアム川崎シンフォニーホール主催公演が対象です。一部対象外もございます。

税制上の優遇措置について

東京交響楽団は内閣府より公益財団法人の認定を受けており、当楽団への御寄附には税制上の優遇措置が施されます。

◎個人の場合:「寄附金額から2,000円引いた金額」の40%^{*3}について、税金(所得税・個人住民税)を控除されます。

また相続税にも控除が適用されます。

◎法人の場合:「損金算入限度額」が一定の算式に従い、拡大されます。^{*3}

^{*3}但し、各該当法令で定められた限度があります。

その他、マッチングギフトやご遺贈、相続ご寄付についてもご案内させていただいております。

公式サイトからクレジットカードでサポート会員にご入会(ご寄付)いただけます。

<http://tokyosymphony.jp/support/procedures.html>



サポート会員へのご入会・お問合せ TEL 044-520-1518

公益財団法人東京交響楽団川崎オフィス 支援開拓本部 E-mail supporters@tokyosymphony.com

秘めた情熱とともに歩むコントラバス奏者

内岡 沙月

UCHIOKA Satsuki

[コントラバス]2025年7月入団

趣味：映画鑑賞、旅先での散策、動物の動画をみること



©N. Ikegami

クラシック音楽が身近な幼少期

クラシック音楽が好きな両親の影響で、4歳の時に幼稚園の音楽教室でピアノを習い始めました。両親はとりわけ音楽を専門としていたわけではありませんが、幼いころから音楽に触れる機会が多かったように思います。実家ではよくCDでクラシック音楽を聴いていましたし、両親と一緒にオーケストラのコンサートに足を運んだことも覚えています。

ひと目で心をつかまれたコントラバス

小学校高学年の頃には音楽の先生になるのが夢で、中学校では吹奏楽部に入ってクラリネットをやりたいと思っていました。新入生向けのコンサートを聴きに行ったときに偶然座ったのがコントラバスの目の前で、先輩の演奏する姿がかっこよくて惹かれてしまい、直感的に「ここを逃したらコントラバスをやる機会はないかも」と思い、吹奏楽部に入部することを決めました。そして無事希望通りにコントラバスを担当することになったのです。

オーケストラに魅了された学生時代

吹奏楽曲に触れるうちに、コントラバスの弦楽器としての魅力を感じ、高校ではオーケストラをやってみたいと思うようになりました。それから吹奏楽部の顧問の先生に相談し、紹介してくれたオーケストラ部がある高校に進学することを決めました。この頃からオーケストラ

で弾くことは楽しかったですが、音楽の先生になるという夢は変わらず、桐朋学園大学へ進学後も教員になろうと考えていました。転機となったのは大学のオーケストラの授業。小さい頃からみんなで音楽を作り上げる合奏などに漠然と魅力を感じていましたが、たくさんのオーケストラの授業に取り組む中でその魅力や奥深さに惹かれ、オーケストラの奏者になりたいという想いが強くなりました。在学中、有志のオーケストラなど、参加できるものには、積極的に参加していましたね。

これからの歩み

定期演奏会だけでなく、バレエやオペラ、学校巡回公演、さらには小編成の室内楽など様々な演奏の機会があるのが嬉しいです。オペラはまだ経験が浅いので、これから勉強できたらいいなと思っています。皆さんのようなオールラウンダーなコントラバス奏者になれるように、技術的にも音楽的にも引き出しを増やしていきたいです。



小学校1年生、発表会に向けてピアノを練習する内岡さん

インタビュー：事務局

NEWS & TOPICS

子どもたちと芸術家の出あう街 開催決定！

4歳から楽しめるオーケストラのコンサートや6つの音楽体験ワークショップなど、音楽とたくさんふれあうことができる1日。お早めにチケットをお求めください。

2027年1月31日(日) 15:00開演 アンダーソン：トランペット吹きの休日
東京芸術劇場 コンサートホール ガーシュウィン：ラプソディ・イン・ブルー
指揮：井田勝大 ほか デュカス：魔法使いの弟子 ほか
 S席 子ども(4歳～高校生) ¥2,000 大人¥4,000
 A席 子ども(4歳～高校生) ¥1,500 大人¥2,800



NEXT PROGRAM

10/3 SAT 東京オペラシティシリーズ 第153回
 14:00 東京オペラシティコンサートホール

指揮：広上淳一
ピアノ：ケヴィン・チェン

ベルリオーズ：歌劇「ペートルとベネディクト」から序曲
 ショパン：ピアノ協奏曲 第1番
 ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲「展覧会の絵」

S¥7,500 A¥6,500 B¥4,500 C¥3,500



10/11 SUN 第746回 定期演奏会 14:00 サントリーホール
10/12 MON 横須賀特別演奏会 14:00 よこすか芸術劇場

指揮：ロレンツォ・ヴィオッティ
 J.S.バッハ（斎藤秀雄編）：シャコンヌ
 ショスタコーヴィチ：交響曲 第10番

[10/11] S¥9,500 A¥7,500 B¥6,500 C¥4,500 P¥3,500
 [10/12] S¥7,500 A¥6,500 B¥4,500

※当公演は休館がございません。



10/17 SAT 川崎定期演奏会第107回
 14:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

10/18 SUN 第149回 新潟定期演奏会
 17:00 リゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館 コンサートホール

指揮：出口大地
ピアノ：マルティン・ガルシア・ガルシア

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番
 チャイコフスキー：交響曲 第6番「悲愴」

[10/17] S¥7,500 A¥6,000 B¥4,500 C¥3,500 P¥3,000
 [10/18] S¥7,500 A¥6,000 B¥4,500 C¥3,000 D¥2,000



[10/3, 10/11, 10/12, 10/17] TOKYO SYMPHONY チケットセンター 044-520-1511 (平日10:00 ~ 18:00 / 土日祝休)
 [10/18] リゅーとぴあチケット専用ダイヤル 025-224-5521 (平日10:00 ~ 17:00 / 休館日除く)



東京交響楽団

川崎市フランチャイズオーケストラ
新潟市準フランチャイズオーケストラ



公式サイト <https://tokyosymphony.jp>



1946年、東宝交響楽団として創立。1951年に東京交響楽団に改称し、現在に至る。現代音楽の初演などにより、文部大臣賞、毎日芸術賞、文化庁芸術作品賞、サントリー音楽賞、川崎市文化賞等を受賞。サントリーホール、ミューザ川崎シンフォニーホール、東京オペラシティコンサートホールで主催公演を行うほか、川崎市、新潟市などの行政と提携し、コンサートやアウトリーチを積極的に展開、教育プログラム「こども定期演奏会」10歳からのオーケストラも注目されている。また、新国立劇場のレギュラーオーケストラとして毎年オペラ・バレエ公演を担当。海外公演もウィーン楽友協会をはじめ59都市83公演を開催。2024年より、アジア全体の音楽文化の向上を図る「東京交響楽団アジア・プロジェクト」を展開している。さらに日本のオーケストラとして初の音楽・動画配信サブスクリプションサービスや、VRオーケストラ、電子チケットの導入などITへの取り組みも音楽界をリードしており、2020年ニコン生放送でライブ配信した無観客演奏会は約20万人が視聴、2022年12月には史上最多45台カメラをいれた《第九》公演を配信し注目を集めた。

近年は、日本のオーケストラ界を牽引する存在として注目を集めている。特に、2022年よりスタートした「R. シュトラウス コンサートオペラシリーズ」は、音楽の友誌「コンサート・ベストテン」において、第1弾《サロメ》(2022年)が第2位、第2弾《エレクトラ》(2023年)が第1位に選出されるなど大絶賛を博した。

桂冠指揮者にユベール・スザン、名誉客演指揮者に大友直人を擁する。

2026年4月よりロレンツォ・ヴィオッティが第4代音楽監督に就任。

Founded in 1946 as the Toho Symphony Orchestra, the ensemble adopted its current name, the Tokyo Symphony Orchestra, in 1951. It presents subscription concerts at Suntory Hall, Muza Kawasaki Symphony Hall, and Tokyo Opera City Concert Hall, and has received nearly all major music awards in Japan, including the Minister of Education Award. In addition to serving as the resident orchestra of the New National Theatre, Tokyo, the orchestra is actively engaged in collaborations with local governments such as Kawasaki City and Niigata City, as well as in a wide range of community and educational programs, including the "Kodomo Subscription Concerts" and Kids Programme ~Orchestra Experience from the age of "0 years". Its international activities, including performances at the Musikverein in Vienna and the "Asia Project," have also attracted considerable attention.

The orchestra has further distinguished itself as a leader in digital innovation within the classical music world, being the first Japanese orchestra to launch a music and video streaming subscription service, as well as introducing VR orchestra experiences and electronic ticketing. In 2020, a live-streamed concert without an audience on the Nico Nico Live platform drew approximately 200,000 viewers, and in December 2022, its performance of Beethoven's Symphony No. 9—filmed with a record 45 cameras—garnered widespread attention.

In recent years, the orchestra has attracted significant attention as one of Japan's leading orchestras. In Ongaku no Tomo magazine's "Top 10 Concerts," Salome (2022) was ranked second, followed by Elektra (2023), which was ranked first. The third and final of the project, Der Rosenkavalier (December 2024), also received outstanding critical acclaim.

Lorenzo Viotti becomes 4th Music Director in April 2026.

マエストロ・シート

【5組10名の小・中・高校生無料ご招待】



NICO NICO TOKYO SYMPHONY
ニコニコ東京交響楽団



音楽・動画配信サイト「TSO MUSIC & VIDEO SUBSCRIPTION」
1か月550円(税込)



TOKYO SYMPHONY ORCHESTRA MONTHLY CONCERT BROCHURE

Symphony

Symphony 2026年(令和8年)9月号[非売品]

発行 公益財団法人東京交響楽団

〒169-0073 東京都新宿区百人町2-23-5 TEL 03-3362-6764

<川崎オフィス>

〒212-8554 神奈川県川崎市幸区大宮町1310

ミューザ川崎セントラルタワー 5階 TEL 044-520-1518

Art Direction & Design : Be.To Bears 印刷 : N-HK ビジネスクリエイト

このプログラムは見やすく読みやすさに配慮した
ユニバーサルデザインフォントを使用しております。